

書評

ハワード・ジン著『ソーホーのマルクス
——マルクスの現代アメリカ批評——』

--- T君への手紙 ---

Howard Zinn, *Marx in Soho*

篠原三郎
Saburo SHINOHARA*

Karl Marx from the world of the dead appears in Howard Zinn's ■*Marx in Soho*■ of New York. On the one hand, Marx critically expresses his opinions about the present stage of the world. On the other hand, he retrospectively talks about his family at Soho in London during his life time.

This historical drama is very inspiring and exciting.

—

T君

最近、格別面白い、というより期待もしていたような本に出会いましたので、突然ながら、急に君にも知らせたく一筆とりました。例の『民衆のアメリカ史』を著している歴史学者のハワード・ジンの『ソーホーのマルクス——マルクスの現代アメリカ批評——』（こぶし書房、岩淵達治・監修、竹内真澄・訳、2002年刊）です。書名からして読書欲を誘ってくれるものですが、君にすすめる以上、それなりに推薦理由を書かねばなりません。しかし、困ったことに、その理由なるもの、改めていう必要もないほどに、用意周到に、本書のうちに書かれているんですね。

T君

実は、本書、その中軸になっているものが、ジン作の歴史劇、文字通りの「ソーホーのマルクス」なのですが、その本体の前には、しっかりした彼の「まえがき」があり、また、後ろの方に

* Former Professor, Nihon Fukushi University

は、竹内さんの丁寧な「訳者あとがき」が書かれています。ちなみに、目次を紹介しましょうか。

- 日本語版への序文
- ハワード・ジンについて
- まえがき
- ソーホーのマルクス
- 訳注
- 短い文献リスト
- 『ソーホーのマルクス』公演ノート
- 著者について
- ハワード・ジンとその他の著作
- 訳者あとがき
- 索引

T君

訳者の竹内さんによれば、「ソーホーのマルクス」という「芝居の内容と狙いはハワード・ジン本人が本書「まえがき」で十分語っているから」、「訳者あとがき」は、「どちらかと言えば、この芝居の周辺から拾ったこぼれ話」を記録しておく位置関係になっていますが、T君、ぼくは、本体にはもちろんのこと、「まえがき」にも、また、「訳者あとがき」にも共感し、いろいろ教えられもし、そのうえで、面白くなってしまいました。

要するに、T君、本書をすすめたい、ぼくなり理由が、「まえがき」と「訳者あとがき」に尽くされてしまっているんです。

いつだったか、「朝日新聞」紙面で、作家の川上弘美氏がある翻訳小説の書評をめぐって、つぎのようなことを述べていたのを思いだすのです。「翻訳小説の書評をしようとするとき、しばしば私は忸怩たる思いにとらわれる。たとえば、物語を説明しようとして、作者の意向を類推しようとして、全体から受ける印象を書こうとして、はたと手が止まってしまうのである。なぜなら、翻訳者による「訳者あとがき」に、それらすべてのことは、書評子である私などが書くよりもよほど周到に書かれているからだ」といっていましたが、君に本書の推薦理由を書こうと思っている今のぼくも似たような心境にあります。

川上氏は、つづけて、「特に、翻訳者に惹かれて読む本書のような小説の場合、ますますその傾向は強い」と述べていた訳ですが、ぼくは、ますます同じ状況に追い込まれていくようです。ぼくも、訳者の竹内さんに惹かれ、歴史劇「ソーホーのマルクス」を読みだしたようなものだから。T君、川上氏はさらに、つぎのようにもつけくわえています。いよいよ恐ろしくなってきました。

「もともとどんな読者よりも訳者はその本のことをよく知っている。もしかしたら、その本の

作者よりもよく知っているかもしれない」。

竹内さんの「訳者あとがき」は、「芝居の周辺から拾ったこぼれ話」と控え目に表現されていますが、実によくできているんです。素晴らしい！ そういう意味では、ジンの「ソーホーのマルクス」は、日本でいい訳者に出会えたものと思っております。

T君

そういう「訳者あとがき」があり、さらに著者であるハワード・ジン本人による「芝居の内容と狙い」が「まえがき」に書かれてあれば、著者『ソーホーのマルクス』は、至れり尽くせり。ぼくが新しく追加していくべきことなど、なかなか見つかりません。そういう訳で、言訳ばかりしてきましたが、T君、ぼくの手紙は、本書のためのマーケティングと思ってください。なにが言わなくてはいけませんね……。

二

T君

そういうことで、ぼくがとくに感心したことを言わなくてはならないとすれば、実はこの点も指摘されていることなのですが、この歴史劇をなにより面白くさせてくれたものは、マルクスが死後あの世の官庁に請願し、いまの現在に帰ってくる着想というか発想ですね。しかも、その場所が役所仕事の手違いで、マルクスの居住していたロンドンのソーホーではなく、ニューヨークのソーホーへ帰ってくる設定なんですね。こういう想定の方は、他にもなくはないと思っておりますが、この歴史劇のテーマ展開にこれほど見事に成功している有効なドラマは、それほど他には多くはないのではないのでしょうか。

そうであれば、T君、「ソーホーのマルクス」で作者がなにを思い、なにを述べようとしているのか、芝居のテーマが目の前に見えてきますよね。彼は、マルクスに問いかけたかったのです。イギリスを中心とした19世紀のヨーロッパから、いまやアメリカに移っている世界資本主義の覇権、ニューヨークにマルクスを復活させることによって、彼に現在の世界のありようをめぐって語らせるのです。「ソーホーのマルクス」の初演が1995年と紹介されていますから、その当時の「現在」です。

その「現在」において、ハワード・ジンは、マルクスに登場してもらい、発言してもらった社会的必要性和意義を感じたのです。ぼくもその声をききたく思います。ジンは、「まえがき」でこう述べています。

「私は、ソ連崩壊が大新聞や政治指導者たちのなかにほとんど宇宙的な大はしゃぎをもたらした頃に、この芝居を書いた。つまり、たんに「敵」が死んだだけでなく、マルクス主義の思想が信用を失墜させた頃にある。資本主義と「自由市場」が圧勝したのだ。マルクス主義は破綻した。マルクスは本当に死んだのだ、と。それゆえ私は、ソ連も、自己を「マルクス主義」と呼ん

で警察国家を作り上げたに過ぎない諸国も、マルクスの社会主義の概念を表現するものではないということをはっきりさせることが重要だと考えた。私は、スターリン主義の残酷さに味方するように自己の理論がねじ曲げられたとマルクスが怒っているところを見てもらいたかった。私は、マルクスを、世界のあちこちで抑圧的支配を確立したエセ社会主義者からだけでなく、資本主義の大勝利を悦にいつながめている西洋のすべてのもの書き連中や政治家たちからも救い出すことが必要であると思った。

もちろん、T君、こう主張できるためには、著者には、「マルクスの資本主義批判は、……基本的に今日でも真実であり続けている」という固い信念があったからこそなんです。

その後、著者は、2002年5月6日付の「日本語版への序文」の冒頭でも、「9・11の、あのとてつもない事件について、カール・マルクスならどう語るであろうか？」と問いつづけます。そして、その末尾には、「我々は現代世界について直接にマルクスに質問することはできない。私の演劇の前提にもかかわらず、彼は生きていないのだから。けれども、我々は、いかにして彼の思想が同時代に生起する事態を理解するうえで役立つのかを考えるために、自己の想像力をはばたかすことはできるのである」と自答されつつ、結んでいます。

したがって、いうまでもないことですが、「ソーホーのマルクス」での言説は、作者、ジンのまさに「想像力」によるものでしょうが、彼の深い学識と自信に裏付けられたもので説得力あり、ユーモアがあり、また面白い人ですね。

T君

アメリカに比べ実際、マルクス研究者や、マルクス主義者の多いはずの日本なのに、ジンによるような歴史劇が創られ、そのような芝居が公演されることのないわが国の現実に考え込まざるをえません。どうしてなのでしょう。訳者の竹内さんは、「アメリカ批判的知識人の孤独な闘いの凄さを日本の知識人は体験していない」と指摘していますが、この辺の違いなのでしょう。反省せざるをえません。現代社会における知識とは、また知識人とは、なんなのか、どうあるべきか、改めて問い質されているように思えてなくなりました。

ともあれ、T君、マルクスに関心のあるものであるならば、だれもが抱いているであろう資本主義の「現在」の諸問題をめぐる「ソーホーのマルクス」の一貫した考え方が、劇のなかで、つぎつぎ展開されてくるのです。これこそ、この歴史劇のテーマなのでしょうが、これは読んでのお楽しみにしてください。

T君、それに加えて、また劇の面白さを倍増させているものは、マルクスの住んでいたロンドンのソーホーでの私生活が、彼の妻イエニーや娘たちを中心に回想されながら、ユーモアに描かれている、しかも、それが、フェミニズムの運動を20世紀になってみてきている、ジンの「現在」的視点から描かれているからなのではないでしょうか。これは、ぼくの読み過ぎでしょうか。フェミニスト作家のアリス・ウォーカーがジンを「私の出会った最良の教師」とさえ賞賛をしているのです。

ともあれ、マルクスやエンゲルスのいろんな伝記のようなものを、ぼくもその昔、あれこれ読んできた記憶がありますが、「ソーホーのマルクス」は、格別味が違ったものです。再三いうようですが、ハワード・ジンの豊かな「想像力」と筆力の成果なのでしょうね。笑いあり、しかし、ペーソスもあり、なんとなく、チャップリンの映画が連想されてきてなりません。

T君

このように、ニューヨークとロンドンの二つのソーホーが「双方 (のマルクス)」に重なり合いながら展開され、いっそう面白くなっていくんです。歴史学者として優れた著者、劇作家としても卓越しています。なお、劇の面白さを生みだしていく作家ジンの秘密について、「訳者あとがき」のところで竹内さんが「ジンの論理とユーモア」という柱をたてて、彼ならではの鋭い解釈をしていますので、ぜひ、注意深く読んでください。

三

これ以上、T君、ぼくにはなにもいうことはないのですが、すでに紹介しておきました先の目次をもう一度見直してください。その「訳注」に注目してください。よくできています。訳者の竹内さんがつくったようですが、だれもが簡単にできる作業ではないと感心しているところです。

さて、T君、いま立ち止まって思うのですが、本著は、歴史劇「ソーホーのマルクス」を舞台にした「現代マルクス入門」といってもおかしくはありません。どうでしょうか。実際、マルクスの著書などにほとんど縁のない人に、この本を読んでもらったら、面白かったと喜んでいました。さらに、マルクスと一緒にビールでも飲みながら、おしゃべりをしたくなったり、彼の家族の人々にも会いたくなったりと、その印象を語ってくれました。ほんとに嬉しくなります。

なお、「ソーホーのマルクス」は、ぼくは都合でいけなかったのですが、朗読劇（演出・岩淵達治、朗読・岩淵達治、前田真理衣（劇団民芸））として2002年9月11日、東京で公演されましたが、他にも、ぜひ、やってほしいと思っております。朗読劇としてだけでなく、できれば、二幕ものぐらいの演劇として上演してくれないかと、願ってもいます。あるいは、あの世の役所に請願運動でも起こしてマルクスを日本に招くイベントがあってもいいですよ。

T君

ぜひ、君の読後感をおきかせください。

現代に危機深まれば波のごと

また甦るカール・マルクス

追伸

丁君の手紙を書き終えたところで、たまたま、竹内真澄さんから「アメリカ史像の変革と日本版「啓蒙の弁証法」——ハワード・ジンによせて——」という文章をもらいました。「ソーホーのマルクス」が東京で公演された折、「ハワード・ジンが提起していること」というタイトルで配布したペーパーを改題，修正加筆したものだそうです。早速読みましたが，大変な労作です。コピーしましたので，同封します。

2002年9月30日，記